

保育園実習に見る看護学生の子ども観

東野, 充成
共栄学園短期大学部社会福祉学科児童福祉学専攻

松木, 美奈子
九州大学医学部保健学科看護学専攻

大池, 美也子
九州大学医学部保健学科看護学専攻

<https://doi.org/10.15017/3256>

出版情報：九州大学医学部保健学科紀要. 5, pp.77-86, 2005-02-18. 九州大学医学部保健学科
バージョン：
権利関係：

保育園実習に見る看護学生の子ども観

東野 充成¹⁾, 松木美奈子²⁾, 大池美也子²⁾

Nursing Students' Views of Children in Practical Training at the Nursery School

Mitsunari HIGASHINO, Minako MATSUKI, Miyako OIKE

Abstract

The purpose of this study was to clarify the change of nursing student's views of children in practical training at the nursery school.

We analyzed reports written by nursing students after practical training at the nursery school from a viewpoint of changes of the image for children before and after the training.

The results were as follows:

1. Their views of children changed from general and vulgar images to such ones "developing children" and "children who have individual differences". These images are necessary for the nursing.
2. The changes of views of children were related to the existence of other people such as the children and the nursery school teachers.
3. It was found that the practical training at the nursery school was meaningful education for nursing students in terms of changing the image for children into suited image to the needs for nursing.

These results suggested that the experimental education in practical training at the nursery school is more effective method for nursing.

It is considered that these offer one suggestion when future nursing education technique is examined.

Key words: Views of Children, Nursing Student, Practical Training at the Nursery School

要 旨

本研究の目的は保育園実習を通した看護学生の子ども観の変容を明らかにする事である。

保育園実習を通した看護学生の子ども観の変容を分析の視点として、保育園実習後に看護学生が記述したレポートの内容分析を行った。

以下のことが結果として得られた。

1) 共栄学園短期大学部社会福祉学科児童福祉学専攻
2) 九州大学医学部保健学科看護学専攻

1. 保育園実習を通して看護学生の子ども観が一般的・通俗的なものから「発達する子ども」、「個性のある発達過程途上の者としての子ども」という看護の実践に即したものと変化した。
2. 子ども観の変容には子どもや保育士という他者の存在が関与していた。
3. 子どもに対する認識が看護の実践に即したものと変化したという点に保育園実習の意義を見出すことができた。

これらの結果は保育園実習という体験学習の有効性の実証に連なるものである。

また、今後の看護学教育方法を検討する上で、ひとつの示唆を提供するものとする。

Key words：子ども観，看護学生，保育園実習

1. はじめに

子どもに対する認識の枠組みとしての子ども観は、子どもと対応するときの行為の枠組みとしても機能し、子どもをめぐる制度や政策にも、特定の子ども観は反映される。したがって、大人が有する子ども観は、結果的に子どもに対して影響を及ぼすことになる。特に、子どもと直接接する立場にある親や教師、少年警察や少年司法の担当官、児童福祉行政や教育行政の担当官、児童福祉や小児医療の実践に携わる者が有する子ども観は、子どもに対して大きな影響を及ぼす可能性があり、それへの理解が特に重要といえる。

看護学の学習途上にある看護学生においても、将来に小児看護や精神看護、地域医療などを通じて子どもと直接接する立場にあり、臨地実習などにおいて子どもと関わる機会を有している。彼・彼女らの有する子ども観は、看護という実践を通して、子どもに対して影響を及ぼしうる位置にあるといえる。

このような看護学生の子ども観に関わる研究として、草場らは子どもとの接触経験と子どもとの関係性を¹⁾、園田らは学生の家族歴と子どもの世話経験や子どもへの感情を検討した²⁾。谷本らは幼稚園・保育園実習前後における質問紙調査から、乳幼児への理解等を含む実習前後の変化を明らかにし³⁾、岩本らは、SD法 (Semantic Differential) をもとに、学年別・接触経験別に看護学生の子どもイメージに関する実態調査を行った⁴⁾。これら

の研究は、研究者が設定した調査項目との関係から一般的・通俗的な子ども観の析出となり、看護学生という特定の社会的・職業的なカテゴリーゆえに生じる子ども観に関する検討の不足があると思われる。また、統計的な方法に依拠する傾向から、そこで析出される子ども観は、具体的な実践のレベルから遊離した抽象的なものにとどまる可能性がある¹⁾。このため、看護学生の子ども観を析出するに当たっては、実際に彼・彼女らが子どもと接したときに、いかなる認識のもとに彼らと相互作用したのか、というレベルの子ども観が、実践との関わりにおいて、より大きな意味を持つと思われる。

そのような実践との関わりとなりうる保育園実習は、看護学生が多数の子どもと直接的に接触する数少ない場である。と同時に、健康な子どもを扱う保育園実習においては、普段接することの多い病気を患った子どもに対する認識から反転的に健康な子どもに対する認識をも浮かび上がらせるということが想定される。また、保育園実習においては、「保育士」という看護とは異なる社会的・職業的カテゴリーに属する「他者」との相互作用をもたらす。認知の形成・変容が他者の媒介を契機としてなされるならば、「保育士」という、看護学生にとっては「他者」が存在する保育園実習においては、病院実習など同輩的な集団でなされるフィールドよりも、認知の形成や変容の過程・様相をより鮮明に取り出すことができるとと思われる。このような保育園実習を通して、看護学生た

ちの子ども観に何らかの変容を来したとすれば、認知や認識の形成・変容に対する実習の機能や意義というものを取り出すことができる。

そこで、本稿では、保育園実習を通した看護学生の子ども観を明らかにするとともに、看護学教育における保育園実習の意義について若干の示唆を得ることを目的とする。

2. 保育園実習の概要

保育園実習は医療保健施設見学の一環として以下のように行われた。なお、小児看護学に関連する講義は、小児看護論1単位15時間、小児保健1単位30時間を履修している。

(1) 対象

本学医療技術短期大学部看護学科1年次生75名。

(2) 実習時期及び時間、実習場所

2002年3月中の1日、8時間。福岡市内のS保育園

(3) 実習目的

保育園で生活している子どもの観察と関わりを通して、成長発達過程にある健康な子どもを理解する。

(4) 実習目標

- ① 遊びを通して子どもとのコミュニケーションを実践できる。
- ② 健康な乳幼児の成長・発達段階を理解できる。
- ③ 子どもの成長・発達段階に応じた日常生活の援助の方法を理解できる。

(5) 実習内容

- ① 保育園の構造や設備を観察する。
- ② 各発達段階の子どもを観察する。
- ③ 各発達段階に応じた遊びを実践する。
- ④ 保育士が実践する子どもへの日常生活(食事, 睡眠, 排泄, 更衣, 清潔)援助を観察する。
- ⑤ 保育士の指導のもとに子どもの発達段階に応じた日常生活(食事, 睡眠, 排泄, 更衣, 清潔)援助を実践する。

(6) 課題レポート

保育園実習の感想について

3. 研究方法

3. 1. 分析の対象

本学医療技術短期大学部看護学科の1年次生75名(19歳~22歳で平均19.4歳, 全員が女性)が保育園実習後に実習の感想を記述したレポートを分析の対象とした。このようなレポートは、保育園実習を通した看護学生の子ども観を明らかにできる貴重な資料であるとともに、看護学生の実践に対する評価となる教員のフィードバックを前提とする。このフィードバックは、教員の評価に 대응しようとする看護学生の意識化を含むものと思われる。すなわち、自己の形成した子ども観を他者に承認してもらおうという意識化のもとに書かれると言う可能性があり、特定の子ども観が形成されやすかつ、抽出しやすいと思われる。

もちろん、レポートそのものから、妥当性のある意味解釈をもって、子ども観の変容過程を捉えることには困難さもある。また、レポートに書かれたものが、いわゆる「建前」としての子ども観だという指摘もあろう。このため、本レポートが、看護学生の子ども観の形成や変容の直接の証拠となるわけではない。しかし、子ども観の形成や変容の過程・様相を推察する手がかりとなり、また、「建前」という批判に対しても、バーガーらが主張するように、言説が現実をつくり出すこともある⁵⁾。すなわち、レポートという言説的实践を通して、たとえ「建前」として書かれたものであっても、結果的にそれが現実化する可能性が強い。

3. 2. 分析の視点

子ども観を抽出するに当たっては、広く社会に共有されるイメージを、メディア表現や芸術表現などから分析する方法⁶⁾、少年司法制度や未成年者喫煙禁止法といった子どもをめぐる法制度や政策に反映されたそれを分析する方法⁷⁾⁸⁾、先行研究で挙げたような質問紙調査など統計的調査を通して抽出する方法などがある。

本稿では、看護学生がレポートに記述した内容の分析を行った。看護学生が捉えている子ども観を分析の視点とし、これが記述されている文章あ

るいは段落を文脈上の意味を損なわない範囲内で区切り、抽出した。抽出した内容を実習前後に分類し、それぞれにおいて意味内容の類似性を検討した。この分析方法、及び視点は保育園実習前の子どもに対する認識を分析の対象とすることによって、子どもに対するより一般的・通俗的なイメージを抽出すると同時に、実習を通してそれがいかに変化したのか、その変容の様相を捉えることを趣旨としたものである。なお、分析にあたっては、独断的な解釈をなくすため、3人の共同研究者がそれぞれのレポートについて討議し、学生の意見の分類を行った⁽²⁾。

3. 3. 倫理的配慮

レポートの内容を研究に用いること、学生の氏名は明らかにしないこと、承諾の可否、及び記述内容は成績評価に関与しないことをレポート提出後に看護学生へ口頭にて説明をし、承諾を得た。

4. 結果及び考察

4. 1. 保育園実習前の看護学生の子ども観

実習前の子どもに対する認識としては、主に2つのパターンを見出すことが出来た。第一に、子どもを不安や戸惑いの源泉、未知なるものと捉える認識様式である。例えば、次のような記載があった< 75名中19名(25.3%) >。

事例A：私には子供の相手が出来るのだろうかとお本当に不安でした。というのは、親戚の中で私は下のほうの年齢であり、私が遊ばれる立場で、近所にも小さい子供の相手をする機会がほとんどなかったからです。

事例G：私には幼い従兄弟がいるので、1歳児や2歳児の子供たちと遊んだことはあったけど、初めて会う何十人の子供たちと遊ぶなんてすることは初めての体験なので、不安も大いにありました。

事例M：私の周りには幼児がいないので、普段接することのない幼児とどのように接すればいいのか不安でした。

第二に、子どもと接することを楽しみや期待と捉える認識様式があり、次のような記載があった< 75名中12名(16%) >。

事例N：今日のはじめて保育園に実習でいった。私は弟と年が離れているせいか、苦勞せず楽しく実習することが出来た。

もちろん、これら2つの認識様式は理想型であって、実際には両者が混在する形で子どもを捉えており、次のような記載があった< 75名中2名(2.7%) >。

事例K：私は子供が大好きでこの保育園実習をかなり前から楽しみにしていました。でも、その反面、大勢の子供の相手をするには初めてだったので、不安や緊張もありました。子供たちとどういふ風に接すればいいのか、いじめられたらどうしよう…とまで考えたりもしました。

事例O：今回の保育園実習は行く前からとても楽しみだったのと同時に不安で一杯でもありました。私は子どもが大好きだし、高校の頃毎月行われていた保育園実習が楽しかった、わくわくしていたのも確かです。しかし子ども達が受け入れてくれるかが心配でした。

子どもに対する初期の認識として、このような2つの様式を見出すことが出来るが、どちらの認識様式も、子どもを近親者と重ね合わせて捉えているという点では共通している。事例AやG、Mが述べているように、子どもを不安や戸惑いの源泉と見るのは、親戚や近所に子どもがいないからであり、いたとしても少数だからである。一方、事例Nが述べているように、子どもと接することを楽しみと考えるのは、自身に年の離れた弟が存在するからである。つまり、認識のベクトルそのものは異なるが、子どもを近親者の一部と重ね合わせて捉えるという視点は共通している。

このことは、子どもに対する認識が家族や近親者を通して形成されることを端的に物語っている。すなわち、子どもをどのように捉えるかは、第一義的に、自身の周りの子どもの有無によって決定されるということである。自身の周りに子どもがいない場合、それは不安や戸惑いの源泉として立ち現れてくるのである。ここには、子どもと大人とを区別し、子どもは大人とは異なった世界に住む者として捉える、「他者」としての子ども観が反映されている。

この結果は、子どもとの接触経験が多いほど（それは結果的に長子という属性に還元されもするが）、子どもを好意的かつ現実的に捉えるという子どもとの接触経験別に看護学生の子ども観を分析したこれまでの研究と同様でもある⁹⁾¹⁰⁾。接触経験のない学生にとっては子どもとは非現実的な存在であり、不安や戸惑いの源泉として立ち現れてくるということとなる。

さて、このような子ども観は、極めて近代的なものである。子ども期が西欧社会において近代以降に発明・発見されたことは、アリエスの研究以来¹¹⁾、子ども研究における基本的テーゼとなっているが、日本でも、明治期以降の近代化の過程の中で、子どもを大人から区別して捉えるまなざしが完成されていったことが、これまでの実証的な研究から明らかにされている¹²⁾。子どもと大人を区分して捉え、子どもを「他者」として見なす看護学生の視点は、近代的な子ども観に連綿と連なるものといえる。

と同時に、ここで表された子ども観にはきわめて現代的な特徴も表れている。それは、自身の周囲に子どもがいない場合、それを不安や戸惑いの源泉として捉えるという視点である。ここには、少子化状況における異年齢集団との交流の希薄さ、少数の同輩的な集団への傾倒といった言辞で形容付けられる、多くの子どもと接触したときの行動の準拠枠がわからない現代青年の状況も反映されている。

以上のように、保育園実習前に見られた看護学生の子ども観は、極めて近代的・現代的な特徴を備えており、より一般的・通俗的な子ども観に近いといえるだろう。

4. 2. 保育園実習を通した子ども観の変化

保育園実習を通した子どもに対する認識としては、それを急激な発達過程にある者と見なす認識様式を取り出すことができた。例えば、次のような記載があった<75名中36名(48.0%)>。

事例A：1, 2歳児よりも3歳児のほうが初対面の人に対する人見知りがなく、積極的にどんどん話しかけてくれました。話し方もはっきりして

きて(中略)一方では知識も増えてきて(中略)1, 2歳児では実は一人で遊んでいる子供がよく見られました。一方3歳児になると、複数で遊ぶ子供がほとんどだったと思います。人の発達はこんなにも早く進むものなのかと驚きました。

事例E：0歳児といっても歩くことができ、表情も豊かで、言葉はなくても、顔全体を使って話しかけてきました(中略)いくら小さくても、私とのコミュニケーションが全くできないわけではなく、私が園児の気持ちを知りたいと思っているのと同様に、園児もわかろうとしているのだと感じました。

事例I：「Sぐみ」は1歳児ということで、援助する事がたくさんあり、実習したという満足感があった。しかし、「Hぐみ」は5歳児でもうすぐ小学校入学ということもあり、ほとんど何も援助することはなかった。1歳児と5歳児の違いを身をもって感じることができ、また観察することができた(中略)遊びを通して学ぶことが多かったけれども、5歳児を担当したときに明らかに1歳児とはすべてのことにおいて成長・発達しているのがわかった。

ここでは、子どもの遊びの様相やコミュニケーション行動、子どもに対する援助の必要性などを通じて、子どもといえども多様な発達段階があり、自らと接触した子どもたちがまさにその過程にあることを実感していた。すなわち、実習前に見られた子どもを近親者と重ね合わせて一括りに捉えるような認識様式は見られず、「発達する子ども」という一つの経験的な認識を確立している。

さらに、同じ発達段階であっても、個人差が存在することも見出している。例えば、次のような記載があった<75名中15名(20.0%)>。

事例B：子供たちから「おはようございます」とあいさつをし、飛びついてくる子、ままごとをしている子、お絵かきをしている子、ウルトラマンごっこをしようと誘ってくる子、遊びだけを見ても個性があるように感じた。自己主張を強く持っているようだった。

事例F：人見知りが激しい子やない子などいろいろ。結構個性が一人一人にありました。

もちろん、このような区分も理念型であって、実際は急激な発達の上であり、そこには個性や個人差が存在するという、子どもに対する二元的な認識を確立している。次のような記載があった< 75名中3名(4%) >。

事例B：発表会に向けて練習しているものを見たとき、クラスごとだったので、成長段階がすぐわかりやすかった。(中略) 遊びを見ても、個性があるように感じた。自己主張を強く持っているようだった。

事例G：(身体測定で)足を伸ばしてみると、身長計からはみ出してしまいそうな子や1歳児にしては大きな子など様々な子がおり、まさに今が身体の成長・発達段階であり、その段階には個人差があるんだなと実感しました。

事例L：5歳児はそわそわしている。6歳児は落ち着きがある。一人でおしっこができる子、おまるに座らせるとできる子がいて、個人差がある。

子どもたちの遊戯練習の様相や身体計測、排泄の様相などを観察することを通じて、看護学生たちは「個別性のある発達過程途上の者」という視点から子どもを捉えている。つまり、この段階に至ると、看護学生は、初期の近親者としての子どもに対する概括的な認識から離れ、発達学的な視点からそれを捉えるようになっていく。

このような個別的・発達の特徴への理解は、看護学生というカテゴリーに由来するものといえる。本稿の題材としている看護学生のレポートは、小児看護学の一環として実施されたものである。したがって、そこに小児看護学で学習した「発達段階」や「発達段階の個別性」といった事柄を盛り込もうとするのは、当然である。そして、このような子ども観は、看護の実践を遂行していく上でも、その基礎となるものである。すなわち、「個別性のある発達過程途上の者としての子ども」という理解は、看護学生という立場ゆえに示されたものといえ、特定の社会的・職業的カテゴリーが特定の子ども観と結びつく相関的な関係が表れている。

この結果は、先行研究の結果とも一致する。谷本らによると、看護学生は、小児看護学の講義だ

けでは子どもの発達への理解が不十分だったにもかかわらず、幼稚園・保育園実習を経ることによって、個別性のある発達を示す者としての子どもへの理解が深まったとしている¹³⁾。本稿でも、保育園実習を経ることによって、看護学生の子ども観は、近親者と重ね合わせて捉える概括的・一般的なものから看護の実践へ即したのものへと変化した。但し、谷本らにおいては、統計的な方法ということもあり、子ども観の変容が何によってもたらされたのかは、明らかにされていない。

4. 3. 子ども観変容の媒介としての子どもと保育士

看護学生の子ども観の変化については、保育園実習における2つの契機が考えられる。第一に、その行動を観察し、また看護学生たちに特定の役割期待を抱いてくる子どもの存在、第二に子ども観変容の媒介者としての保育士の存在である。

子どもの行動を実際に観察することによって、子ども観が変容を来したのは、看護学生の語りからも明らかである。保育園において様々な遊戯活動に興じたり、発表会に向けて練習を行ったり、身体計測を行ったり、排泄したりしている子どもを観察することによって、また実際に子どもとコミュニケーション行動をとることによって、子ども観が発達学的なものへと変容を来した、より正確に言えば、小児看護学の講義において学習した子ども観を体得したということは、これまでの看護学生の語りから示されている。つまり、子どもという他者が媒介となって、子ども観が特定のものに変容を来しているのである。

さらに、他者認知が未発達の子どものにとっては、看護学生といえども、あくまでも保育士と同じ「先生」として映る。つまり、子どもは「先生」としての役割期待を看護学生に対して投げかけてくる。この役割期待に対して、看護学生はたとえば次のような反応を見せていた< 75名中49名(65.3%) >。

事例H：友人の子どもによく絵本を読んであげるのでそのノリで読んだら、子どもたちも非常に喜んでくれたので、とてもうれしかった(中略)

それぞれ一生懸命自分のことを話してきて、聖徳太子の気分になってしまった。

事例 J：午後からは3歳児組に行った。0歳児とは違い、教室に入ったときから「先生、先生」と言われた。少し照れくさかったが、うれしかった。しかし、「先生、先生」と言われてとてもうれしいのだが、一人の子ばかりに集中して話すのもよくないし、かといってみんなと話しているとその子は「他の人と話しちゃだめ」といつてきた。どの子にも平等にというのはとても難しいと思った。

このように、子どもからの「先生」という役割期待に対して、看護学生もある程度応えようと決意している。

「先生」という役割期待を遂行していく上で、「個別性のある発達過程途上の者」としての子ども観はその土台となるものである。それなくしては、保育という実践は立ち行かなくなる。なぜなら、個別性と多様な発達段階を有した子どもを世話する保育実践を遂行する上で、子どもを発達学的な視点に基づいて捉えることは必要不可欠だからである。この意味で、子どもからの「先生」という「誤った役割期待」も、間接的であれ、看護学生の子ども観の変容に影響を及ぼしているといえるだろう。

一方、実習を通した保育士に対する認識としては、たとえば次のような記載があった<75名中53名(70.7%)>。

事例 B：列に並ばずおしゃべりしている子がいたときに、先生は直接注意するのではなく、クラスの子に呼びかけて、子ども同士が注意しあうような形をとっていた。「みんな困るんだよ」と協調性を求めたり、年下のクラスが先に並べたことを伝えて、年長としての自覚を持って手本のとなるようにと伝えているようだった(中略)食欲、便の回数、睡眠の入り時間など一人一人の健康状態を記録してあったり、お母さんとの連絡のやり取りなど、先生の情報収集の把握のすごさに感動した。

事例 I：プロの保育士さんたちは指導の仕方や小児への接し方が私たちとは全く違うことを実感した。あと一つ心に残っていることは、宗教上のこ

とで食事が少しずつ違うのに驚いた。(看護においても)生活背景のことも把握しておかなければならないことを実感した(括弧内は筆者による加筆)。

事例 M：先生方はこの子は今どこまでできて、排泄はいつどのようにしたかを覚えていて、次々にてきぱきとこなしていて、さすがプロと思いました。

これらの言葉が示しているのは、看護学生は、保育士の行動を2つのベクトルから理解しているということである。第一に、事例 B や M が示しているような、発達段階に応じた保育を展開することの重要性であり、第二に、事例 B や I, M が示しているような、子どもの個別性に応じた保育を展開することの重要性ということである。これらは、いうまでもなく、保育園実習を通して看護学生が獲得した子ども観に対応するものであり、これらの言葉は、保育士の行動の観察を媒介とすることによって看護学生の子ども観が変容してきていることを示している。

以上のように、看護学生の子ども観の形成・変容には、子どもや保育士という他者の媒介が存在する。これまでの諸研究が看護学生の子ども観の構造や種類を中心的に取り上げていたのに比して、それが形成・変容される過程、特に子ども観の変容における子どもと保育士という他者の役割を取り上げた本稿は、認知や認識の形成・変容における他者存在の不可欠性を前提とした諸理論に鑑みるとき⁽³⁾、重要な実証的示唆を提供するものといえよう。

4. 4. 子ども観の変化から見た看護学教育における保育園実習の意義

このような看護学生の子ども観の変容過程は、看護学教育における保育園実習の意義に関わるものと思われる。保育園実習以前は、看護学生は子どもを近親者と重ね合わせて概括的な捉え方であった。しかし、実習を経ることによって、個別性のある発達を示す者として子どもを捉えるようになった。このような子ども観は、看護の現場で子どもと接触したときの実践の土台ともなり、保

【表】看護学生の子ども観

人数 (%) N=75

実習前の子どもへの認識	不安の源泉	19(25.3)	2名 (2.7)
	期待の対象	12(16.0)	
実習を通した小児への認識	発達の対象	36(48.0)	3名 (4.0)
	個性の対象	15(20.0)	
実習を通した子どもからの役割期待		49(65.3)	
実習を通した保育士への認識		53(70.7)	

保育園実習という教育実践を通じて獲得されたといえる。すなわち、子どもに対する認識の変容に関する保育園実習の効果を挙げることができる。

看護学教育における体験学習の意義や目的において認知変容の効果は、従来取り上げられてきた。例えば、経鼻胃管挿入技術の獲得やそれに対する不安の軽減に体験学習が効果あることを¹⁴⁾、看護師としてのコミュニケーション技術の重要性を気づかせるにあたって、模擬患者 (Simulated Patients) を用いた体験学習が有効であること¹⁵⁾、などが示されている。これらが示すように、不安の軽減やコミュニケーションの重要性への気づきといった認知・認識の形成・変容に体験学習は大きな効果がある。子どもに対する認知・認識の変容に保育園実習が一定の役割を果たすという本稿の結果も、体験学習の効果を確認するものと思われる。

5. おわりに

以上、保育園実習を通した看護学生の子ども観の変容過程および看護学教育における保育園実習の意義について示してきた。その結果、①保育園実習を通して子ども観が一般的・通俗的なものから看護の実践に即したものと変化すること、②それには子どもや保育士という他者の存在が関与していること、③認識の変容という点に保育園実習の意義を見出せること、が明らかとなった。

さらに、本稿で得られた結果を以下のようにより広い実践・研究の文脈から検討する。

第一に、本稿では看護学生という社会的・職業的なカテゴリーに特有の子ども観が抽出された。このことは、子ども観研究の文脈に位置づけな

せば、一般的・通俗的な子ども観を広範囲な人々を対象とすることによって明らかにしていくと同時に、親や教師、少年司法や少年警察の担当官、教育行政や福祉行政の担当官など、それぞれの社会的カテゴリー・職業的カテゴリーに応じて、子ども観を重層的・多層的に分析していくことの重要性を示すものと思われる。

第二に、本稿では看護学生の子ども観の変容に子ども及び保育士という他者の媒介が関与していることが明らかとなった。このことは、看護学教育の文脈に位置づけなすと、看護における技術や知識だけでなく、認知や認識そのもの、またアイデンティティの構築といった事柄にも、医師や他の看護師、患者やその家族だけではない、多様な他者が関与しているということであり、看護学教育における多様な他者の役割について明らかにする必要性を示している。

第三に、本稿では、認知・認識の変容という点に、看護学教育における保育園実習の意義を見出した。このことは、体験学習に関する教育学的研究という文脈に位置づけなせば、様々な職業分野において現在、体験学習が実施されているが、その効果を測定するに際してひとつの指標を提示したということになる。子ども観との関連で言えば、子どもと接する立場の者の職業体験学習において、子ども観がいかに変化したのか、またしなかったのか、それを明らかにすることの重要性を示している。

このように、本稿で得られた結論から、若干の一般的な示唆を導出することができる。但し、本稿で示された結果は、事例分析ということもあり、仮説検証的なものというよりも、仮説生成的なものである。したがって、今後の課題としては、ここで得られた結果をもとに、質問紙調査や参与観察など、より実証的な調査を通して、子どもと関わりの深い様々な立場の者の子ども観やそれが形成・変容される過程について明らかにしていくことである。

補 注

(1) 市江の論文では、1980年代から90年代の小

- 児看護文献に掲載された看護学生及び看護師の子ども観研究が跡付けられている¹⁶⁾。それによると抽出された38論文すべて、因子分析やSD法などを駆使した統計的な調査研究であった。
- (2) 事例研究には主に、具体例から帰納的に一般理論を導き出す方法論と分析の枠組をあらかじめ設定し、収集された事例を事実として証明していく演繹的な方法論があるが、本稿も分析の視点や枠組をあらかじめ設定するという点では、後者に該当する。しかし、後者の研究方法は、往々にして論旨に都合のよい事例だけを紹介しがちである。そこで、本稿では、紙幅の制限上、例示する事例の選択は行うが、本稿で設定した子どもに対する認識のカテゴリーに当てはまると3人の共同研究者によって判断されたものに関してはその人数を記載する。
- (3) 人間の世界に対する認知や認識の根本的なもののひとつとして自己に対する認知・認識が挙げられるが、その形成自体が他者との相互作用を不可欠としているということは、自己意識論、社会化論、アイデンティティ論のこれまでの系譜からも明らかである。大池らは、エリクソンのアイデンティティ論をもとに¹⁷⁾、看護学生のアイデンティティ形成において子どもや保育士が果たす役割を実証している¹⁸⁾。なお、前述の論文と本稿は、共通した事例を用いているが、その問題意識や目的、理論的背景などは大きく異なる。
- 引用文献
- 1) 草場ヒフミ・梶山祥子・吉田由美・井上映子：看護学生の子どもの観—子どもとの関係性，千葉県立衛生短期大学紀要，8(2)，109－114，1989
 - 2) 園田悦代・市島昭子：看護学生の子どもの観，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，4，21－25，1994
 - 3) 谷本公重・猪下光・尾方美智子：看護学生の幼稚園・保育園実習前後における子どもへの認知とイメージの変化，香川医科大学看護学雑誌，3(2)，7－14，1999
 - 4) 岩本真紀・近藤美月：看護学生の子どものイメージに関する実態調査，香川医科大学看護学雑誌，6(1)，137－142，2002
 - 5) バーガー，P. L. & ルックマン，T. 山口節郎訳：日常世界の構成，新曜社，1977
 - 6) 中田周作：戦後日本における子ども観の研究，日本子ども社会学会編『子ども社会研究』5，56－68，1999
 - 7) 林雅代：近代日本の『青少年観』に関する一考察，日本教育社会学会編『教育社会学研究』，56，65－80，1995
 - 8) 徳岡秀雄：米国における少年司法政策の動向と子供観・人間観の変化：日本教育社会学会編『教育社会学研究』，39，18－31，1984
 - 9) 前掲書 1)
 - 10) 前掲書 2)
 - 11) アリエス，P. 著 杉山光信・杉山恵美子訳：〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族，みすず書房，1980
 - 12) 前掲書 7)
 - 13) 前掲書 3)
 - 14) 大池美也子・長家智子：看護学生による経鼻的胃管挿入技術の体験学習に関する一考察，九州大学医療技術短期大学部紀要，26，59－66，1999
 - 15) 大池美也子・村田節子：看護学生に対する模擬患者を用いたコミュニケーション技術教育の検討，九州大学医療技術短期大学部紀要，26，67－72，1999
 - 16) 市江和子：小児看護学における子どものイメージに関する研究—1980年代から90年代の小児看護文献をもとに，日本赤十字愛知短期大学紀要，13，39－44，2002
 - 17) エリクソン，E. H. 著 岩瀬庸理訳：アイデンティティ—青年と危機，金沢文庫，1973
 - 18) 大池美也子・松木美奈子・東野充成：看護学生の職業的アイデンティティ形成における保育園実習の役割，日本保健医療社会学会編『保健医療社会学論集』，13(2)，44－54，2003

